

キャンプ参加後におけるキャンプ効果の活用に関する研究

静野 聖子 (生涯スポーツ学科 野外スポーツコース)

指導教官 林 綾子

キーワード：キャンプ効果、キャンプ参加経験、日常生活、活用

1. 序論

文部科学省は、少年期、青少年期にこそ経験することが望まれる様々な生活体験、社会体験、自然体験の機会を十分に持つことができず、精神的に豊かな生活を行うことが困難になっている状況があると報告している¹⁾。これまで、組織キャンプの効果に関する研究では数多くなされており、日本キャンプ協会²⁾は、これらの多くは自己、他者、自然に関するものが向上すると報告している。しかし、数か月後にはこれらの効果がキャンプ前の数値に戻ってしまう²⁾との報告があるが、キャンプ効果の日常生活における活用に関する研究はあまり行われていない。そこで本研究では、キャンプで学んだ事(キャンプ効果)が日常生活において活かされているかどうかを調査することを目的とする。

2. 研究方法

調査対象者

平成22年までに実地されたK大学の教育キャンプ過去の参加者94名と野外教育研究会M主催の教育キャンプ過去の参加者25名で、回答に不備のないK大学91名と、野外教育研究会23名を調査対象とした。

調査用紙

キャンプで学んだ事(キャンプ効果)が日常生活において活かされているかを測定するために、筆者が独自に作成したキャンプ効果・キャンプ効果の活用に関するアンケート、3領域14項目(自己領域①自己理解、②思考力、③判断力、④自己表現力、⑤自己効力、⑥探究心、⑦自己抑制、⑧自発性の8項目、他者領域①コミュニケーション、②対人不安、③信頼感、④おもしろいの4項目、自然領域①環境への興味・関心、②環境行動の2項目)の質問と4項目の記述からなるアンケート用紙を用いて調査を実施した。

3. 結果・考察

参加者の属性(参加回数・参加種類・職業・カウンセラー経験)やその後の経験によって、キャンプで学んだ事(キャンプ効果)の活用の違いが

あることが明らかになった。いずれも、キャンプ参加回数が大きく影響していると考えられる。また、キャンプで学んだ事(キャンプ効果)は、キャンプに参加し、様々な年代の人と関わりを持って活動することによって、それぞれの発達段階に応じて違いはあるがたくさんの刺激を受け吸収していったこと、またキャンプといういつもとは違う環境の中で、様々な活動を通して仲間と向き合い、互いに助け合う中で、自然と他者と向き合いまた自分とも向き合ったことが自己領域や他者領域に影響を与えたのだと考えられる。また、日常生活でキャンプでの学びを活かすことができる参加者は、キャンプに参加した回数や経験の違いが大きく、キャンプでの学びが自分の糧になっていることが影響していると考えられる。

4. 結論

キャンプで学んだ事(キャンプ効果)は、参加者の参加回数やキャンプでの経験によって活用に違いが影響していることが明らかとなった。参加回数が多い方が学びに大きく影響を与え、また参加者の発達段階の時期によっても影響があると考えられる。キャンプでの学びはキャンプ終了後も、参加者自身の糧となってキャンプ以外でもキャンプでの学びを活かしていると考えられる。そのため、キャンプ効果の活用をより詳細にしておく必要が明らかとなった。このことは、今後、キャンプを発展させるためにも、キャンプで学んだこと(キャンプ効果)の活用を調査することはキャンプ効果を実際の生活に反映させるために必要であると考えられる。

5. 【引用・参考文献】

- 1) 文部科学省、中央教育審議会答申「新しい時代を拓く心を育てるために」、1998
- 2) 橘直隆・平野吉直、「生きる力を構成する指標」、野外教育研究、第4巻、第2号、11・16、2001